

# 粉粒体を伝播する衝突励起地震に関する実験的研究 II

○松榮 一真<sup>1</sup>, 荒川 政彦<sup>1</sup>, 保井 みなみ<sup>1</sup>, 松本 恵里<sup>1</sup>, 辻堂 さやか<sup>1</sup>

高野 翔太<sup>1</sup>, 長谷川 直<sup>2</sup>

<sup>1</sup>神戸大学大学院理学研究科, <sup>2</sup>宇宙科学研究所

## はじめに

探査機はやぶさで観測された小惑星イトカワの表面地形のように、小惑星表面はボルダーなどのレゴリス層で覆われていることが明らかになった。レゴリス層で覆われた小惑星の表層地形は、天体衝突のような外的要因によって変化すると考えられている。例えば小惑星エロスに小さなクレーターが少ない理由は、天体衝突による衝撃がエロス全体を揺さぶり、その結果クレーター孔を支えるレゴリス層の構造が崩れるからだと考えられている(Richardson et al.2005)。このように天体衝突によって発生する振動は小惑星の表層地形進化を支配しているが、衝突励起振動に着目した実験的研究は少ない。McGarr et al.1969では、月震計で得られた小天体衝突時の地震波形を解析するため、月表層を模擬した試料への衝突実験を行って衝突励起振動を実測した。最近では我々が100m/sまでの低速度衝突実験を行い、ガラスビーズ中(バルク密度は1.51g/cm<sup>3</sup>, 安息角は22°)を伝播する衝突励起振動の減衰過程を調べた(Yasui et al. in prep)。本研究では、より現実的にレゴリス層を模擬するため石英砂を標的試料として用い、衝突速度を小惑星帯での平均衝突速度(5km/s)まで拡張し衝突励起振動の計測を行った。

## 実験方法

衝突実験は、神戸大学の縦型一段式軽ガス銃と宇宙科学研究所の縦型二段式軽ガス銃を用いて行った。弾丸には、直径4.7mmのポリカーボネート球を用い、0.2-6.9km/sの速度まで加速した。標的試料には直径500 $\mu$ m(バルク密度は1.48g/cm<sup>3</sup>, 安息角は32°)の石英砂を用いた。標的表面に加速度計(日本アビオニクス製SV1113:電荷感度5.47pC/sm<sup>-2</sup>, 応答周波数:0.5Hz-10kHz)を、衝突点からの位置を変化させて2.5cm埋めて設置した。加速度計の信号はチャージアンプを通した後、A/D変換速度100kHzのデータロガーで記録した。なおチャンバー内は1000Paから10Paで真空引きしている。

## 実験結果

図1は、5km/sで衝突させたときに励起された衝突振動波形の時間変化を示している。単一のピークを示す単発波形で、立ち上がり時間は約0.5msであった。得られた加速度波形の解析から次の様なことがわかった。

(1)ピークの最大値から最大加速度  $g_{max}$  を計測し、加速度計までの距離  $x$  が大きくなると共に最大加速度が小さくなることがわかった。また、衝突点からの距離が同じ時、衝突速度が大きくなるにつれて最大加速度

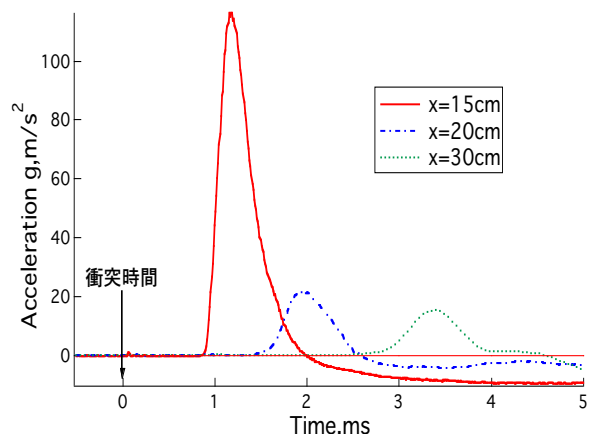


図1. 観測された衝突振動波形

が大きくなることがわかった。さらに、クレーター半径  $R$  で規格化した距離  $x$  と最大加速度の関係から、衝突速度によらず一つの経験式で表すことができた(図 2)。最大加速度は規格化距離  $x/R$  の-2.98 で減衰する。一方、ガラスビーズ標的における衝突振動の減衰率は-2.4 (Yasui et al.)であり、減衰率は標的物質によって変化することがわかった。

(2)衝突振動波形のピーク値の時間差を計測することで標的物質中を伝播する振動の速度を計測した。本研究では、衝突速度によらず約 80m/s となり、ガラスビーズについて計測された伝播速度、約 100m/s より遅

いことがわかった。砂を伝播する音速を測定した先行研究では P 波・S 波それぞれの速度が約 180m/s、約 70m/s であり、本研究の計測した加速度波形が S 波に近い速度で伝播していることを示唆する。

(3)加速度波形のピーク値の半値幅を計測することで加速度の持続時間を見積もった。衝突速度によらず約 0.8 秒となり、これは弾丸の貫入時間とオーダーで一致することがわかった。

これらの結果を用いて、小惑星上の天体衝突により励起された振動でレゴリス層が流動化し、地形が変化する範囲を推定した。この推定では、天体重力によらずこの実験で得られた経験式が適用できると仮定した。図 3 に直径 10cm の岩石天体が小惑星に 2km/s で衝突した場合の結果を示す。この図では、振動加速度が各天体の地表面での重力加速度まで減衰するまでの距離  $x$  を示す。この距離  $x$  から、重力の小さな小惑星ではより広範囲の地形が 1 回の衝突で変化することがわかる。我々の今後の目標は、このような実験と議論を通してレゴリス層で覆われた小惑星表面地形の衝突進化を明らかにすることである。

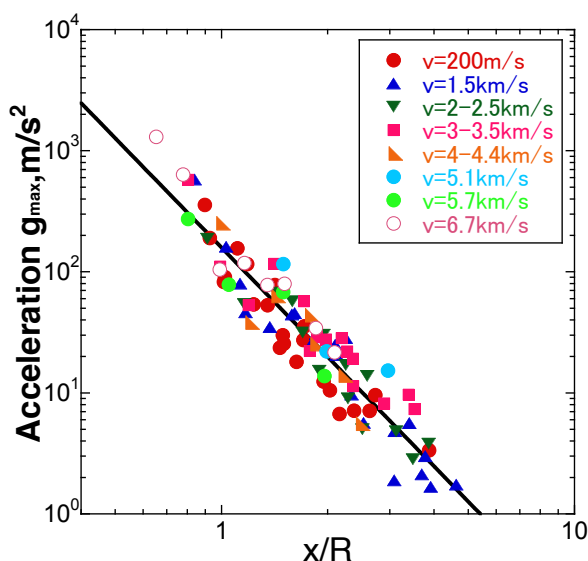


図 2. 衝突振動の距離減衰

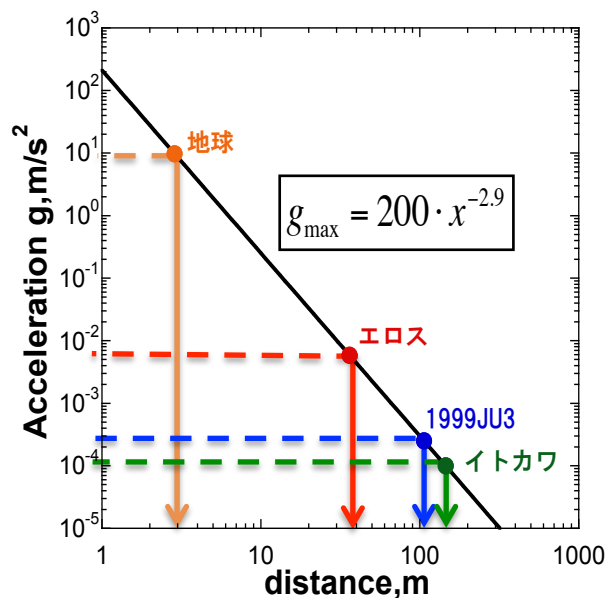


図 3. 1 回の衝突で地形が変化する範囲